

## 小学校における新教科の研究開発動向について (1)

藤岡 秀樹\*

(1996年6月27日受理)

### 1 はじめに

学校完全週5日制, 国際化, 情報化などの対応を念頭において, 小学校の教育課程・学習指導要領の見直し, 教科の再編が進められつつある。1995年4月には「教育課程に関する基礎研究協力者会議」も発足している。

現行の学習指導要領に依拠しない, 学習指導要領改訂のための研究を実施する「研究開発学校」(学校教育法施行規則第26条の2)という制度がある。例えば, 1980年代後半から1990年代初頭にかけて, 「生活科」を創設するために約50校程の小学校を「研究指定校」として文部省は指定し, 実践を進めたことを挙げることができよう。最近では, 兵庫教育大学附属小学校が1992年に低学年の「国語」と「算数」を統合・再編し, 新教科「記号科」を開発したことは記憶に新しい。この「記号科」については, 「第2生活科」という厳しい批判を含め, 様々な波紋を引き起こした<sup>1)</sup>。兵庫教育大学附属小学校の実践以降, 小学校での「研究開発」の実践が増加している。「研究開発学校」で開発された新教科は, 概ね, 「新しい学力観」の立場に立ったものが多数を占めている。

現在は, 「研究開発学校」として約35校程指定されているが, その半数以上は, 小学校学習指導要領改訂のために研究が行われている。「研究開発学校」の研究動向を分析した三石(1995a, 1995b, 1996)は, 教科の再編・統合・新設が多岐にわたっていることを見いだしている。次の教育課程および学習指導要領の改訂の動向を把握するためにも, 「研究開発学校」の実践の分析をすることは意義があると思われる。

### 2 研究開発学校の特徴

三石(1996)は, 小学校の「研究開発学校」の研究動向を以下の5つのタイプに分類している。

#### ① 教科統合による新教科設置の試み

「生活科」に引き続き, 教科の統合を行ったもので, 兵庫教育大学附属小学校の「記号科」(低学年の「国語」と「算数」を統合)や「表現科」(「図画工作」と「音楽」を統合)の新設を代表的なものとして挙げることができる。

#### ② 「生活・活動」を柱にした教科による再編

---

\* 岩手大学教育学部

低学年「生活科」の趣旨を生かし、中学年以降にも拡張したもので、滋賀県栗東町立治田東小学校の「生活体験科」を挙げることができる。

### ③ 教科内容と名称の変更に基づく教育課程の再編

教育内容の変更だけではなく、教育課程の領域（各教科・道徳・特別活動）の再編まで踏み込んだ実践を行っているもので、香川大学教育学部附属高松小学校や福島大学教育学部附属小学校などがある。香川大学附属高松小学校では、選択学習を導入し（中学年以降週当たり2時間）、総合活動（「しらうめ活動」）を全学年にわたって週1時間設定し、「特別活動」の時間数を削減している。教科の再編としては、中学年で「理科」「社会」を廃止して、「環境科」を新設し、全学年にわたって「図画工作」と「音楽」を統合して「表現科」を新設している。

他方、福島大学附属小学校では、後述するように、「特別活動」を廃止し、各教科と道徳で教育課程を構成し、「図画工作」と「音楽」を廃止して「表現科」を新設し、「理科」「社会」「家庭」を廃止して、「人間科」「地球科」を新設している。

### ④ 「社会の変化への対応」を意識した教科の新設

国際化に対応した教科の新設を行った千葉県東金市立鶉嶺小学校や情報化に対応した教科の新設を行った鹿児島大学教育学部附属小学校などが挙げられる。鶉嶺小学校では、低学年では週当たり1時間の「英語活動」を、中学年以降では「英語活動」と「体験総合活動」からなる「国際体験科」（週当たり各1時間）を新設している<sup>2)</sup>。他方、鹿児島大学附属小学校では、「国際科」と「情報科」を全学年で週当たり各1時間新設している。

### ⑤ 既設教科の中での「総合学習」の設置の試み

教科の再編ではなく、「総合学習」の中に新しい単元を開発しているもので、東京学芸大学附属大泉小学校の実践を挙げることができる。東京学芸大学附属大泉小学校では、低学年の「生活科」に相当する「広め学習」の中に総合単元を設け、また、中学年以降では「総合学習」の中で、「環境」「国際」「人間」という3つの領域を取り上げている。

上述のように、新教科の研究開発のあり方も多岐にわたっている。研究紀要などの成果報告書を検討すると、その実践についての評価も積極的な評価を与えることができるものもあれば、かなりの問題点を有するものまで多岐にわたっている。数多くの「研究開発学校」の実践の中で、筆者が関心を持ち、注目した小学校の実践としては、福島大学教育学部附属小学校と東京学芸大学附属大泉小学校の実践がある。本論文では、福島大学教育学部附属小学校の実践を紹介し、分析することにした。そして、今後の教育課程の再編についての可能性を明らかにすることも試みたい。

## 3 福島大学教育学部附属小学校における研究開発

福島大学教育学部附属小学校は1993年度から1995年度までの3年間にわたって、文部省の「研究開発学校」の指定を受けた。前述の三石（1996）の分類では、第3のタイプ（教科内容と名称の変更に基づく教育課程の再編）に位置づく。以下に紹介する内容は、福島大学教育学部附属小学校（1995 a, 1995 b）に基づいている。

### (1) 教育課程の基本方針

「求める人間像」として、福島大学附属小学校では、①豊かな人間性につながる資質や能力

の開発，②日本国憲法や教育基本法で求めている精神，③日本の文化や伝統の尊重と国際理解，④自分らしさの自覚と発揮——の4点を挙げている。そして，人間像の具体的な姿として，①人間が生きる環境としての地球（宇宙）そのものの望ましい姿を求める人間，②地球に生きる人間として，隣人を愛し，世界の人々を愛する心を持ち，互いに理解を深め合い，共に生きようとする人間，③体を鍛え，健康で安全な生活をしようとする人間，④人間として，自分なりの思いをしっかりと持ち，豊かに表現することができる人間，⑤言語・数量・図形を理解し，情報を正しくとらえ豊かに活用することができる人間——の5点を挙げている。全体像としては、『愛』と『英知』をそなえた人間として求められる資質や能力を獲得していく人間像として捉えられている。

新教科の構成としては，①を育成するのが，低学年では「生活科」，中・高学年では「地球科」であり，②を育成するのが，低学年では「生活科」，中・高学年では「人間科」である。③を育成するのは，全学年を通しての「体育科」であり，④を育成するのは，全学年を通しての「表現科」である。⑤を育成するのは，全学年を通しての「国語科」と「算数科」である。

領域としては，「特別活動」を廃止し，各教科と「道徳」の2領域構成となっている。「特別活動」を廃止した理由としては，学校行事の拡大，クラブ活動の多様化など，内容が肥大化してしまい，教科の領域に影響を与えてしまうこと，「子どもの自主的・実践的な態度を養う」という目標に対して，教師が子どもの活動に大きく関与している実態も否定できないこと，全学年に学級活動を，上学年ではさらにクラブ活動を位置づけた「特別活動」は年間の活動内容を管理する上でも，問題を抱えていたことを指摘している。

## （2）学習時間の弾力化

教科の特性，子どもの発達段階に応じて，1単位時間の弾力化を図っているのが特徴である。ノーチャイム制を採用し，日課として，午前中は休憩時間を含む100分のブロックを2コマ設定している。午後の時間の運用は，学年及び曜日によって弾力的に行われている。

教科毎の1単位時間を示したものが表1である。直接体験を必要とする教科（「生活科」「人間科」「地球科」）や実技教科は，90分というゆとりある時間枠を設定していることが分かる（ただし，低学年の「体育」は60分）。週当たりの配当回数は，表2に示されているが，週によって弾力的に運用されている。年間総授業時数を示したものが表3である。低学年の「生活科」は，文部省の基準である週当たり3時間よりも1時間多いことに対して，「体育」は，全学年を通して年間総授業時数が少なくなっていることや「特別活動」に配当されている時間を「地球科」「人間科」に，「家庭」に配当されている時間を「人間科」に割り当てていることが見いだされる。

## （3）各教科の概要

「算数」「国語」などのこれまでも設定されていた教科や「道徳」においても，少なからぬ変容が見られるが，本稿では紙幅の都合上，研究開発された新教科に限定して概要を紹介することにしよう。

### A. 「人間科」

「人間科」の目標は，次のようになっている。

表1 福島大附属小の各教科，道徳の1単位時間の基本

区 分	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
国 語	45分	45分	45分	45分	45分	45分
算 数	45分	45分	45分	45分	45分	45分
生 活	90分	90分				
人 間			90分	90分	90分	90分
地 球			90分	90分	90分	90分
表 現	90分	90分	90分	90分	90分	90分
体 育	60分	60分	90分	90分	90分	90分
道 徳	45分	45分	45分	45分	45分	45分

表2 福島大附属小の各教科，道徳の週配当回数

区 分	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
国 語	8	8	7	7	6	6
算 数	4	5	5	5	5	5
生 活	2	2				
人 間			2	2	2	2
地 球			1	1	2	2
表 現	2	2	2	2	2	2
体 育	1	1	1	1	1	1
道 徳	1	1	1	1	1	1
総 回 数	18	19	19	19	19	19

※ 回数は週によって弾力的に運用する。

表3 福島大附属小の年間授業時数

区 分	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
国 語	272	280	245	245	210	210
算 数	136	175	175	175	175	175
生 活	132	134				
人 間			140	140	140	140
地 球			105	105	140	140
表 現	136	140	140	140	140	140
体 育	60	60	90	90	90	90
道 徳	34	35	35	35	35	35
総授業時数	770	824	930	930	930	930

※ この表の授業時数は，1単位時間を45分に換算したものである。

人間の生活を見つめる活動を通して、人と人との関わりや人間の営みについての理解を  
 図り、国際社会に生きる人間として、共によりよい生き方を求めようとする態度を育てる。

相手の思いや願いを理解すること（人間理解）によって、相手を大切にしようとする心（愛）が生じ、また、愛が生じるからこそ、人間は英知を働かせて相手を理解しようとする。このように、『愛と英知』が相互に作用し合っって人間理解を深めていく姿を大切にしたいと考えて策定された。

内容を構成するのに際しては、①今の生活を見つめ直し自分の在り方を考えるのに必要なもの、②現在及び将来の社会に生きていくために、自分なりの考えをもつ必要があるもの——の2点を、また、単元の系統性については、①身近なところから広い視野へ、②思いや願いを実現しようとする姿から自分なりの課題を追究しようとする姿へ——の2点を考慮している。低学年の「生活科」を中心として培われてきた主体的な学び方や生活の仕方を基盤とした、体験重視型の教科となっているのが特徴である。単に、「社会」と「家庭」が合科されたものではないことに留意したい。従来の中・高学年「社会」や高学年「家庭」の内容をかなり絞り込み、精選化・重点化を図っていることが窺われる。

次に紹介する「地球科」でも同様だが、「思考力・判断力」や「関心・意欲・態度」の育成を「知識・理解」と関連づけている点も注目したい。多くの「研究開発学校」の実践に通底する考え方は、「新しい学力観」であり、過度の「関心・意欲・態度」の強調と「知識・理解」の軽

表4 「人間科」の内容

項目	主 内 容
家庭生活 ・ 学校生活	家庭生活や学校生活の在り方及び家族や友達、地域の人々との関わりについて体験を通して考えさせることによって、集団の一員として相手を思いやり協力する態度を育成していく。また、子どもたちが生活を営むための基礎的な知識や技能、習慣などを身に付けさせることによって、日常の生活に役立てようとする態度を育成していく。
生 産 ・ 消 費 ・ 環 境	生産活動の中には、よりよい生活への願いを込めて努力し工夫する人間の営みを見ることができ。また、消費者の願いは生産にも反映されている。こうした人と人との関わりや人間の営みをとらえさせることによって、よりよい消費生活を送ることができるようになっていく。また、人間が自然環境を利用したり、克服したりして生活している様子を調べさせることによって、自然環境の大切さに気付かせ、改めて人間と自然環境との関わりを問い直したり、自分でできることから行動に移したりしていく実践的な態度を育成していく。
文 化 ・ 伝 統	これからの歴史を創っていく子どもたちが、自分自身を見つめ直し、これからの自分の生き方や世の中の在り方について模索することができるようにしていく。そのためには、子どもたちに時間による変化を認識させ、その変化は人間の知恵や努力がもたらしたものであり、現在の自分たちの生活にも結び付いていることに気付かせていく。
公 共 ・ 福 祉	人間関係が希薄になってきている現代だからこそ、子どもたちに様々な立場の人々（高齢者、障害をもつ人々など）と直接ふれあうことにより、様々な人々の生き方や考え方を学ばせていきたい。そして、自分を見つめ直し、同じ人間として共に生きていくにはどうすればよいのか、自分なりに考えることができるようにしていく。
国際理解	国際理解は、教育活動の様々な場面に関わるものであるが、人間科では外国の人々やくらしなどに関心をもち、直接外国の人々と交流する場を設けることによって、互いの文化を理解し合うとともに、同じ人間として尊重し合い、共に生きていこうとする態度を育成していく。また、国際社会における日本の立場や役割を理解し、世界の中の日本人としての自覚をもつことができるようにしていく。

視が見られる。しかし、福島大学附属小の場合は、「知識・理解」と切り離して、「思考力・判断力」や「関心・意欲」を捉えてはいない。

内容構成は、表4に示すような5つの領域から成り立っている。各地の学校で既に「総合学習」などで実践が行われている「ボランティア教育」「福祉教育」「国際理解教育」「環境教育」などの内容も取り入れられている。「人間科」の単元の一覧（年間計画）を表5に示す。

研究開発の2年次の授業例（福島大附属小，1995 a）を検討してみよう。まず最初に，第3学年の単元「家族といっしょ」を取り上げてみよう。家族の役割や仕事，家族の意義を理解させ，自分が家族のためにできることを考えさせ，その一例としておやつ作りを行うという授業の流れである。家族については，既に低学年の「生活科」で取り上げられているが，第3学年の「人間科」ではより広がり・深まりをみせた形で展開されている。調理実習（おやつ作り）も，従来は高学年の「家庭」で実施されていたが，「人間科」では火を使わない調理に限定しているものの，包丁の使い方などの基礎的な技能を身に付けるという目標を設定して実施している。子

表5 「人間科」の単元（年間計画）

月	3 年	4 年	5 年	6 年
4	友だちのわを 広げよう (14) (1)あくしゅでなかよし (2)いつもお世話になっている人たち	楽しい学校 (3)	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)
5		わたしたちの くらしを見つめて(20)	畑からわたしたちの 食卓に (19)	見つめよう 人間の歩み (20)
6	なしを作る人売る人 (1)なし作りのひみつI(4)	(1)ごみ問題を考える (2)くらしを守るために (3)くらしを豊かにした人々	(1)ビニルハウスを訪ねて (2)買い物の前に (3)野菜を用いた料理 を作ろう	(1)わたしたちの まち再発見 (2)奈良の都 (3)わたしが興味 をもった時代
7	友だちのわを 広げよう (8) (3)友だちのわをせかいに			
8	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)
9	なしを作る人売る人 (10) (1)なし作りのひみつII (2)スーパーマーケットのひみつ	自分でできたよ (10) (1)できることはないかな (2)自分たちでやってみよう (3)こんなこともできそうだよ	世界の人と 手をつなごう (12) (1)よりよい製品を作る人々 (2)世界の国々となかよく	みんなの願いを実現する ために (13) (1)よりよい願いを知ろう (2)みんなの願いと政治
10	楽しい学校(1)	楽しい学校(1)	楽しい学校(1)	楽しい学校(1)
11	家族といっしょ(7) (1)家族っていいな (2)自分でできたよ	ぼくらの友だち(15) (1)養護学校の友だちと いっしょに (2)外国の友だちといっ しょに	高齢者の生きる姿を 見つめて (15) (1)高齢者社会を見つめて (2)老人福祉施設を訪ねて (3)わたしたちにできることは	家庭生活に うるおいを (12) (1)家族に必要なものは (2)ぼくわたしができること
12	昔の人々から学ぼう(7) (1)おじいさん・おばあ さんといっしょに			
1	楽しい学校(2)	楽しい学校(2)	楽しい学校(2)	楽しい学校(2)
2	昔の人々から学ぼう(12) (1)おじいさん・おばあ さんといっしょに (2)わたしたちの町のうつかり (3)れきしを学んだわたしたち	いろいろな土地に 生きる人々 (13) (1)福島県のくらし (2)日本のくらし	伝統の中に よきを見つけ(12) (1)お正月に楽しかったことは (2)「家族の日」をつくろう!	わたしたち 地球家族 (13) (1)ユニセフって、何？ (2)世界の国々を 見つめて
3	楽しい学校(2)	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)	楽しい学校(3)
計	90分×70	90分×70	90分×70	90分×70

どもの自主性を重んじるあまりに、確実に身に付けるべき技能の習得を軽視してしまいがちになるが、この実践ではそれを避けているという点では注目に値しよう。

次に、第6学年の単元「見つめよう 人間の歩み」を取り上げる。小学校の歴史の授業は、一般に通史になりがちであるが、「人間科」では、体験学習を重視し、単元の導入部で福島市街地の、終末部で会津若松市のフィールドワークを行っている。歴史の見方・学び方の学習としては、典型教材として奈良時代を取り上げ、それを踏まえて、子どもたち一人一人が調べてみたい時代・テーマを決め、探究活動を行わせている。各時代の共通点・相違点を4つの観点（政治、文化、生活、国際関係）に即して話し合わせ、因果関係などを考えさせている。典型教材の歴史学習を通して、その後のフィールドワークの深まりが見られ、先人の営みを自分たちの今の生活に結び付けて、「生き方」「在り方」を考えることができるようになったという成果を得ている。これまでの高学年の「社会」での地理的分野や歴史的分野で取り扱っていた内容をかなり絞り込んで、精選化・重点化を図っているが、社会認識の形成という視点から見ると、やや不十分さを感じざるを得ない。歴史的分野の教材を地理的視点で捉え直すといった授業も導入すべきではなかっただろうか。さらに、自己学習による補充学習が必要であるかもしれない。

「人間科」での学習を「道徳」において深めた実践もある（福島大附属小，1995b）。「公共・福祉」領域は「道徳」での「思いやり・親切」の単元と関連づけ、総合的な学習構想を立てている。一例として、「人間科」の単元「災害から生命を守るために」（1995年1月の阪神大震災の教材化）の学習後、道徳性の高まりを捉え、その補充・深化・統合を図るために、「道徳」の授業を設定したこと〔単元「手をとりあって」（阪神大震災直後にボランティアに出かけた人の資料を取り上げた）〕を挙げることができよう。授業に際して留意しなければならない点は、「人間科」の授業実践に道徳的価値の高まりを意識し過ぎないことである。ともすれば、「人間科」が「第2道徳」になる危険性を内包している。この点については、もう少し多くの事例を検討していく必要があるだろう。

## B. 「地球科」

「地球科」の目標は、次のようになっている。

身近な自然に働きかける活動を通して、科学的な見方や考え方を養うとともに、自然と人間とのかかわりについての理解を図り、自然を愛し、大切にしていける態度を育てる。

問題解決能力や科学的な見方・考え方を養い、自然と人間とのかかわりについての理解を図る過程で、望ましい地球の姿を求めするために必要な知識や技能、思考力、判断力を身に付け、自然を大切にしていける態度を育成していくことを目指している。「人間科」と同様に、「知識・理解」と「関心・意欲・態度」「思考力・判断力」とを切り離して捉えていない点が、注目に値する。

授業づくりの視点としては、①観察・実験、飼育・栽培、調査、製作などの体験的活動を単元の展開に位置づける、②次の活動につながる問題を自己決定できるようにするために、一つの活動のまとまりの中で、「自分の活動から自然と人間とのかかわりについて何が分かったのか、何が解決できない問題として残ったのか」を明らかにする場面を単元の中に位置づける — の2点を挙げている。

内容構成は、表6に示すような4つの領域から成り立っている。「①天体の動き」は、人間が住む地球そのものに必要なもの、「②大気・水・大地の変化」は、人間が生きるために不可欠なもの、「③生物の適応」は、人間と共生・共存するもの、「④物質とエネルギーの利用」は、人間が生活するために必要なもの——として各々位置づけられている。そして、子どもを取り巻く自然を総合的に学ぶという視点から、4領域を相互に関連づけて単元が構成されているが、かなりの絞り込みが見られている。

表6 「地球科」の内容

項 目	主 な 内 容
天体の動き	人間が住む地球そのものに必要なものを学ぶ
大気, 水, 大地の変化	生物が生きるために不可欠なものを学ぶ
生物の適応	人間と共に共生・共存するものを学ぶ
物質とエネルギーの利用	人間が生活するために必要なものを学ぶ

表7 「地球科」の単元(年間計画)

月	3 年	4 年	5 年	6 年
4	信夫山となかよし-I -春の信夫山-(9)	小鳥の森の自然-I -春の小鳥の森-(5)	信夫山の植物(4)	ぼくらの地球 -大気をさぐる-(12)
5	動物となかよし(6)	川がつくり出す自然-I -春の川探検-(5) 小鳥の森の自然-II -初夏の小鳥の森-(5)	こちら気象情報センター(9)	植物のからだと 成長(10)
6	空気と水の力(5)	電気や光のひみつ(5)	てこやてんびんの働き (8)	水溶液とわたし たちの生活(12)
7	あぶくま川となかよし-I -夏のあぶくま川-(5)	川がつくり出す自然-II -夏の川探検-(3)	信夫山の植物(4) 郷土の自然-裏磐梯-(13)	宇宙の神秘(2)
8	信夫山となかよし-II -夏の信夫山-(3)	川がつくり出す自然-III -初秋の川探検-(4)		人と動物のからだ(10)
9	じしゃくと電気の利用 (10)	小鳥の森の自然-III -秋の小鳥の森-(6)	摺上川にのぼるサケ (6)	宇宙の神秘(4)
10	あぶくま川となかよし-II -秋のあぶくま川-(3)	水の変化とわたしたち の生活(7)	身の回りの水溶液(5)	
11	太陽からのおくりもの (5)	川がつくり出す自然-IV -冬の川探検-(4)	生命の神秘 -発生と成長-(6)	大地とわたしたち の生活(10)
12	信夫山となかよし-III -冬の信夫山-(3)		こちら気象情報センター (4)	宇宙の神秘(3)
1	あぶくま川となかよし-III -冬のあぶくま川-(4)	小鳥の森の自然-IV -冬の小鳥の森-(4)	太陽や月の働きと私 たちの暮らし(8)	電磁石と発熱
2		熱の利用(5)	摺上川にのぼるサケ(3)	
3				
計	90分×53	90分×53	90分×70	90分×70



「地球科」の単元の一覧（年間計画）を表7に示す。

研究開発の2年次の授業例（福島大附属小，1995 a）を検討してみよう。まず最初に，第4学年の単元「水の変化とわたしたちの生活」を取り上げる。水の三態変化の学習を中心に据え，水を物質として捉えるだけでなく，運動エネルギーを電気エネルギーに変換できるものとして捉えることができるようにすることを目標としている。水の溶解や水を温めた時の変化（水蒸気の発生）の実験を行い，スチームアイロンの体験やボイラー見学を通して，温められた水と人との関わりについての理解を図らせている。さらに，蒸気機関車や火力発電所での水蒸気の働きについて，エネルギーという視点で考えさせ，自然と人との関わりについての理解が深まったという成果を得ている。「物質とエネルギー」領域の類似の実践としては，第3学年の単元「太陽からのおくりもの」がある（ソーラーハウスの制作を通して，太陽熱の暮らしの中で利用を考えさせる）。

次に，第6学年の単元「大地とわたしたちの生活」を取り上げてみよう。この単元は「大気・水・大地の変化」と「生物の適応」の2つの領域の総合化を図ったものである。特に校外学習（吾妻山と一切経山）と結び付けて，火山活動や植物の様子などの自然に着目させたダイナミックな実践である。子どもが決定した学習計画に基づいて観察を行わせ，さらに友達との情報交換により学習計画を修正し，新たな視点からの追究を行わせている。その結果，火山活動による大地の変化と厳しい環境での生物の植生との関連が理解できるようになった。さらに，大地のでき方について，火山や水の力による堆積実験（モデル実験として，①流水の働きで川から運ばれた土が海の中に積もる様子の実験，②マグマが噴き出して溶岩が流れて積もる様子の実験，③火山が爆発して火山灰が飛ばされて積もる様子の実験）を通して，大地のでき方や広がりや時間を空間と関係づけて推論することができるようになった。そして，大地の変化と人々の生活との関わりについて，自然災害の予知（地震や津波，噴火）や大地のエネルギーの恵み（温泉・地熱発電，土や岩石）などの観点での選択学習を行わせ，発表会を開き，まとめをするという授業の流れである。体験学習・問題解決学習・選択学習を組み込み，ダイナミックな展開を行っている点は注目に値するだろう。ただ少し気になった点は，本単元の目標の1つに「自然の力に対する驚異や畏敬の念を培うことができる子どもを育成する」という記述がある。ともすれば，このことの強調は科学的認識との整合性に問題を持つ恐れがある。授業内容及び子どもの反応などを併せて検討する必要があるだろう。

### C. 「表現科」

「表現科」の目標は，次のようになっている。

表現及び鑑賞の活動を通して，創造活動の基礎的能力を育てるとともに表現の喜びを味わわせ，豊かな情操を養う。

「表現科」で目指す子どもの姿として，①対象から様々に感じ取って，自分なりの思いを抱き，その思いを豊かにふくらませていく子ども，②自分らしい感性を働かせて，自分らしい見方，感じ方，考え方を生かして表現する喜びを味わう子ども，③自分や友達の表現のよさや美しさに気付き，自分にとって，価値ある表現を主体的に追究していく子ども——の3点を挙げている。

内容構成は，表8に示すような2つの領域から成り立っている。そして，内容は①素材を基

表8 「表現科」の内容

領域	内容
表現 → <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; text-align: center;">             素材 テーマ 場所の特徴           </div>	歌を歌う（独唱・重唱・合唱） 旋律楽器や打楽器を演奏する （独奏・重奏・合奏） 音を使ってイメージを表現する 材料をもとにして遊ぶ 描いたり形にしたりする 材料を加工してつくる 劇をする 踊りで表す 言葉で表す  いろいろな演奏形態の音楽を聴く 造形作品を見る 自然の美しさを味わう 芸術作品を鑑賞する 友達の取り組みのよさを感じ取る
鑑賞 → <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; text-align: center;">             よさや美しさ           </div>	

にした表現——子どもの身の回りにあり、体全体を通して感じ取り、働きかけることのできる直接的なものを表現する、②場所の特徴を基にした表現——子どもが活動の場所に働きかけながら、その場所の形状や雰囲気などから直感的に感じ取ったことを基に表現、③テーマを基にした表現——子どもがイメージを広げながら表したいことを発想し、自分らしく表現する、④よさや美しさの鑑賞——「表現と一体的に位置づけられる活動」及び「とりたてて行われる活動」であり、対象のもつよさや美しさを味わう——の4分野が設定されている。そして、子どもの表現の姿として、平面、立体、歌、楽器、作る、動き、踊り、劇、詩、お話などの多様な形態が採れるように支援を行う。

紙幅の都合上、「表現科」の単元の一覧（年間計画）は省略するが、その内容は単に「音楽」と「図画工作」が合科されたものというよりも、もっと多岐にわたっている。

研究開発の2年次の授業例（福島大附属小，1995 a）を検討してみよう。第6学年の単元「ぼくらの時代」（90分×5）を取り上げてみる。6年生の3学期に「自分らしい表現で小学校最後の足跡を残そう」という共通テーマから自分の表現テーマを決め、表現内容や方法、材料、手段など、表現に関わる一切の計画を自分なりに構想し、自分の表現を追究しようとするものである。表現方法の選択では、工作、文章、絵画、音などが、材料・用具の選択では、紙、木材、フルートとピアノなどが、表現手順の工夫では、アイデアスケッチ、試作などが選ばれていた。自分なりの表現作品としては、「卒業をテーマにした絵」「思い出に残る校舎の絵」「宝物や小物を入れる物」「小学校の思い出を表した曲」「作曲した曲を楽器で演奏」「『友情』をテーマにした絵本」などがあった。最後に、表現を振り返り、よさを皆で味わうという授業の流れである。成果としては、最も表現したいことを自分で選んだ方法で自由に表現していくことを認めることで、既習の表現方法や技法を積極的に生かしながら、自分の表現を追究するようになったことや、自分なりの表現の見通しをより確かなものにする必要性を自覚させることができたこと、自分の表現に必要な材料を自らが準備し、試みたい技法に必要な道具の特性を調べる

などの姿が見られ、「表現を自ら切り拓いていく力」を育成することが可能になったことなどが得られている。

問題点としては、子どもの願い・思いを優先すると、一部の表現活動に傾斜してしまう恐れがある。どの子どもにも共通に履修させる表現活動とその子固有の表現活動との比重をどこに置くかが課題となるであろう。授業担当者の総括では、今後の課題として、「表現の媒体」「表現の要素」を踏まえなければ、一人一人に学習内容の系統化が構造化しにくいことや、自己表現として他教科との関連が図れる一面、国語科や体育科の表現との関連と具体化が十分に実践化できなかったことが挙げられている(福島大附属小, 1995 b)。

#### (4) 評価の方法

一般に、指導方法や教材開発には多くの時間をかけ、大きな成果を得ても、評価については、時間不足も関係して十分な成果が得られていないことが多い。福島大学附属小学校の場合も、研究紀要などを見る限りは、授業における評価について、十分に言及されていない。いわゆる「新しい学力観」に立つ授業実践では、指導と評価の一体化が強調され、毎時間観点別評価を行っている(評価のための指導に陥っている例も散見する)ものが極めて多い。この点に関する限りは、福島大学附属小学校の実践は、必ずしも「新しい学力観」に立ったものとは言い切れない。しかしながら、「人間科」「地球科」「表現科」などの開発された新教科は、評価になじまないとの考えに立っているわけではない。それは、通知表に新教科についての評価項目があるからである。本論文では、筆者が入手した通知表の紹介を通して、新教科の評価について分析することにした。

図1に「人間科」「地球科」「表現科」の通知表の評価項目を示す。各学期毎に具体的な到達目標を提示して評価を行う「到達度評価型」の通知表にはなっていない。この点は、評価研究の遅れ・不十分さを感じさせる。評価の観点は、学年共通(一部の項目は複数学年にわたって共通)であり、3つの新教科はいずれも4つの観点から成り立っている。評価段階は「よい」「ふつう」「もう少し」の3段階評価となっている。

「自分の思い」「自分たちの生活」「自分を取り巻く」という記述が「表現科」や「地球科」の観点に多く見られることも特徴として挙げられる。「研究開発学校」である東京学芸大学附属大泉小学校でのカリキュラム開発においては、“自分知”(=学んだことが自己にとってどういう意味を持つのか)を「豊かな学力」を捉える1つの視点として押さえられている(東京学芸大学附属大泉小学校, 1995, 1996)が、福島大学附属小学校の場合も、この「自分」という視点を評価観点に含めている点では共通点が見られ、興味深い。

観点の内容は一部を除いて抽象的表現に留まっているのは、改善の余地があるだろう。観点別評価以外に「総合的にみた学習・行動の所見」欄が設けられている。開発された新教科の特性上、子どもの個性や「よさ」を評価するのであれば、各教科毎に自由記述欄を設けた方が、その趣旨が反映された評価になり得たのではないだろうか。

## 4 残された課題

本論文では、小学校の「研究開発学校」の中で、教育課程の領域の再編まで踏み込んだ実践を行った福島大学教育学部附属小学校の事例を取り上げ、検討を行った。体験重視<sup>3)</sup>・問題解決

お も な 観 点		評 価								
		1 学 期			2 学 期			3 学 期		
		よ い	ふ つ う	も う 少 し	よ い	ふ つ う	も う 少 し	よ い	ふ つ う	も う 少 し
地	自分を取り巻く自然に興味・関心をもって働きかけ、よりよい自然を求めているとする。									
	自分を取り巻く自然の中から問題を見だし、時間的な変化に着目しながら調べ、自然と人々の生活とのかかわりについて考える。									
	目的に応じて学習の計画を立て、問題解決に適した方法を考へて、装置や資料・情報などを活用しながら追究するとともに、その過程や結果を分かりやすく記録する。									
球	自分を取り巻く自然の特徴や因果関係、規則性などをとらえ、自分たちは、自然の変化の影響を受けながら生活していることを理解する。									
	自分の思いをしっかりとち、自分らしい表現を追求しようとする。									
表	自分の感じ取ったことから自由に発想し、表したいことや表し方の構想を練る。									
	材料や用具、楽器などの特徴を生かしながら、自分らしい表し方で自分の思いを表現する。									
	自分や友達の表現、芸術作品のよさや美しさを味わう。									
人	家庭生活や我が国の産業、国土の様子について関心を持ち、進んで調べたり交流したりして、様々な人々と共に生活しようとする。									
	家庭生活と産業とのかかわりや支え合うことの意味について追究し、自分の生活の在り方を考える。									
問	目的に応じて計画を立て、資料を効果的に活用し、自分の考えを工夫して表したり、日常生活に関する基礎的な技能を身につけたりする。									
	我が国の産業や国土の特色、支え合う人々の様子やよりよい家庭生活について理解する。									

図 1 福島大附属小の通知表の例 (第 5 学年)

学習の積極的導入という視点に立脚した新教科のカリキュラム開発については、概ね好感を持てるものが多いように感じられた。このような教科の再編は、学校完全週5日制に対応した学習内容の精選化(文部省の言い方では「厳選化」)・重点化と結びつくものであり、今後とも十分に注意を払い、検討を行う必要がある。しかしながら、高齢化社会の到来だから「福祉教育」「ボランティア教育」を、情報化社会だから「情報教育」を、国際化の時代だから「国際理解教育」や小学校における「英語」学習を、といった視点で安易に新教科を創設すれば、学習内容の精選化・重点化とは逆の現象を引き起こしかねない。従来の教科の配当時間の削減とそれに伴う学習内容の過密化現象を引き起こし、「算数」や「国語」といった基礎・基本の学力の習得がおろそかになる恐れがある。子どもの発達段階に即した教科領域や内容、単元の設定などについての吟味・検討がないと、混乱を引き起こすだけではないだろうか。

ところで、梅原(1994)は、「研究開発学校」で行われている新教科の内、幾つかの魅力あるテーマは、総合学習<sup>9)</sup>に位置づけて行った方がより効果的であり、いたずらに新しい教科を生み出すことは、かえって教科概念の混乱をもたらし、逆に教科に閉じ込めることによって、広がりを持った学習の可能性を押しさえつけることにもなりかねないと指摘している。梅原の指摘には支持できる面も多い。総合学習については、奈良女子大文学部附属小学校(『けいこ』『しごと』『なかよし』)の3領域から教育課程は成り立っているが、総合学習は『しごと』に該当する)や長野県伊那市立伊那小学校などの優れた実践がある。総合学習の先進校の実践を検討しつつ、新教科の開発、教科の統合・総合化、クロスカリキュラムの必要性・妥当性の有無や総合学習の在り方を検討していくことが、今求められていると言えよう。

#### 【註】

- 1) 「記号科」についての批判は、梅原(1994)が詳しい。また、筆者も「記号科」の持つ問題点を「新しい学力観」と対応づけて論じた(藤岡, 1996 b)。他方、「記号科」の実践に積極的に関わった研究者の論考としては、中洩・兵庫教育大学附属小国語部(1996)がある。
- 2) 鶴嶺小学校の「国際体験科」の実践——とりわけ小学校における英語学習の実践——については、椎名(1995)が詳しい。
- 3) 藤岡(1996 a)は、小学校3年生担当教師に対して、「生活科」的な新教科を3年生以降にも導入することの賛否を尋ねたところ、「反対もしくは不要」の回答数は、「賛成もしくは必要」の回答数の約2倍を占めていることを見いだした。その理由を分析したところ、賛成・必要派は主として体験重視の必要性から、反対・不要派は自然認識・社会認識の欠如・希薄化の恐れと結び付けて論じられていた。このように、「生活科」のような体験重視の新教科を3年生以降にも導入することについては、予想以上に反対や疑問視が見られる。
- 4) 梅原(1994)の想定している総合学習とは、多数の教科にまたがりつつ、個別教科では必ずしも正面に据えられないような大きなテーマや、教科にこだわらない現代の切実な人類的課題や、実習を含む労働学習などである。例えば、「人間のからだと心」「国際平和と核廃絶・軍縮」「日本の中の外国人」「性とエイズ」「地球環境と各国の役割」「地域の中での米づくり」などを挙げている。

#### 【付記】

福島大学教育学部附属小学校の1995年度の通知表を提供して下さりました同校教務主任の

内藤良行先生に厚く感謝いたします。本研究は、文部省科学研究費補助金（一般研究C 課題番号 05680192）に基づくものである。

## 文 献

- 藤岡秀樹 1996 a 「生活科」の教育心理学的研究 — 「生活科」の授業づくりと評価を中心として — 文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 藤岡秀樹 1996 b 『新しい学力観』を考える — 教育心理学の視点から — 心理科学, 18(1), 15-30.
- 福島大学教育学部附属小学校 1995 a 研究紀要第 29 集 21 世紀に生きる心豊かな人間を育成する教育課程の創造
- 福島大学教育学部附属小学校 1995 b 新時代の教育課程を問う 文部省指定『研究開発』の成果と課題
- 児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校 1995 学習をつくる 生活をつくる 自分をつくる — 豊かな学力をどう育てるか — ぎょうせい
- 三石初雄 1995 a 小学校教育課程再編と理科教育実践の課題 雑誌『教育』 No.592, 14-23.
- 三石初雄 1995 b 研究開発学校からみた小学校教育課程再編の動き 理科教室, No.484, 69-81.
- 三石初雄 1996 小学校教育課程再編の動き 佐藤年明(編) 「生活科」における合科的教材の開発とその指導力量形成に関する研究 文部省科学研究費補助金研究成果報告書 Pp.15-30.
- 中洌正堯・兵庫教育大学附属小学校国語部 1996 “記号科”で国語教育を見直す 明治図書
- 椎名仁 1995 “英会話”をとり入れた小学校の国際体験学習 明治図書
- 東京学芸大学附属大泉小学校 1996 平成 7 年度研究紀要 豊かな学力の育成 — 『国際』『環境』『人間』総合単元の創造 —
- 梅原利夫 1994 教育課程論からみた「新教科」開発の問題 梅原利夫・河合尚規・谷田川和夫・山科三郎 新学力観と新教科 あゆみ出版 Pp.111-157.